

く、道生の一実諦思想では「浄土」(方便)を説き示すことが出来なくなるであろう。ゆえに曇鸞は、『浄土論』所説の「方便」と「般若」の二諦の相関性を、「智慧」(第一義諦)に包摂して語りつつも、僧肇の二諦論―すなわち方便・言説・用における二諦相即論―を受容し、どこまでも「方便」としての二諦論の形態を維持していく。

以上、曇鸞は僧肇を受け二諦相即論を形成しつつも、同じくその影響を受ける道生のように、一実諦思想に陥ることはない。一実諦では方便の説示意趣が希薄となり、仏無浄土説に偏るであろう。曇鸞においては「浄土莊嚴」を示す以上、常に「方便」を示さなければならないのである。これが僧肇から曇鸞への流れである。つまり『論註』の「名義撰対」の論理は、僧肇の二諦論を背景に、『浄土論』を解釈した結果であると考えられる。

「往生伝類」における

善導・善道間についての一考察

山崎 真純

中国・日本浄土教において善導の伝記は、約三十種にのぼる多数の文献に現れる。その中、王古の『新修往生伝』の中巻には二種の善導伝を並記するという形であったとされる。それは良忠の『観経疏伝通記』巻一に中巻には三十三人の伝記を収め、その第二十五に善導、第二十六に善道を挙げている(『大正蔵』巻五七、四九八c一四―一五)ことから分かる。これに

より、従来善導二人説・一人説というものが取り沙汰されてきたが、私は一人説の立場に立ち、なぜ善導の伝記が二つに分けられるに至ったのかを考察する。

まず『新修往生伝』の善導伝を見ると、多少の文字の変動がある他、『浄土往生伝』の善導伝にはない記述が、『新修往生伝』では追加されていたり、詳細な説明が加えられている。これは『新修往生伝』において、特殊な例の一つである。『新修往生伝』を概観してみると、『浄土往生伝』と重なるほとんどの伝記は、『新修往生伝』では省略されているのである。にもかかわらず、善導に関する伝記は、『浄土往生伝』より『新修往生伝』にある記述の量が多いのである。

次に『新修往生伝』における善道伝を見てみる。これは全くといっていいほど『浄土往生伝』の善導伝の記述を参照されていない。そのため、両者の比較はできないが、『往生西方浄土瑞応刪伝』にある善導伝の話とは多少相応する所があるので、それを挙げると、①道綽との出遇い、②七日不萎、③道綽三罪である。一々の文字まで同じというわけではないので、『新修往生伝』の善道伝がこれを見て作成したか否かは不明であるが、現存する資料の中において、この『往生西方浄土瑞応刪伝』の善導伝と一番近いのである。しかしその中でもⅠ出身地、Ⅱ明勝法師との師弟関係、Ⅲ慧遠を慕って廬山を訪ねる、Ⅳ疾病による往生などは、この『新修往生伝』の善道伝で初めて現れるのである。

以上、『新修往生伝』における善導・善道の二つの伝記を見たが、その中で最も両者が異なっているのは、往生相であろう。

善導伝の往生相は、『浄土往生伝』の善導伝にある記述を受け継ぎ、捨身往生をしたとされている。対して、善道伝の往生相は、これとは全く異なった入寂の様子を記している。その内容を述べる、善道が二・三日前から死を予知して、にわかに軽い病氣にかかり、室を閉じて、おだやかに長逝したというのであり、ここには捨身往生とは全く違った入寂の様相が記されているのである。そうすると、王古は、捨身往生をした善導と、穏やかに長逝した善道の二人を考えていたということになる。

善導伝における捨身往生説は、戒珠の説をほぼそのまま継承したものであって、戒珠と同じ善導観に立っていたことを示している。また、当時の捨身の重要性から判断しても、善導〓捨身往生者という記述は必要であったと考えられる。

ところが、王古にはもう一つの善導観がある。それが善道伝に示される前掲の伝承で、そこでは六九歳でおだやかに長逝した善道が語られている。その入寂年の永隆二年が金石文等によって傍証される点から考えて、この善道の記事は、相応の根拠に基づく資料にもとづいて書かれたものであると考える。

つまり二つの伝記を総合して考えると、王古は戒珠により明説された善導の捨身往生が一般に流布していたので、この伝承を尊重してまず善導伝を編述した。しかし他面、なお多く残存していた諸文献や金石文に基づいた善導の資料を集め、これも捨てる事ができず、あえて善道伝として別に立てたのではないだろうか。つまり『新修往生伝』の善導伝では、『浄土往生伝』では記されていない善導の往生相等を他の資料により加

えたのではないかと推定するのである。

無量寿経の浄土観

緒方義英

『無量寿経』の教説は、無量寿仏とその浄土によって「一切衆生の救済」が成立することを明らかにし、それによって他力成仏の因果を開示するものである。そこで本論は、『無量寿経』に説かれる「無量寿仏と浄土」の関係性に着眼し、その衆生済度の一端を考察するものである。

さて、無量寿仏の浄土は、一切衆生の救済を目的に莊嚴されるが、それは無量寿仏自身が正覚の条件として建てた「四十八の誓願」に根拠する。法蔵(因位の無量寿仏)は、自らの国土を莊嚴するにあたって、二百一十億に及ぶ諸仏の国土の中から、清浄に莊嚴された仏土を觀見して、その一切の功德を円満に成就せんと發願するのであるが、それは、師である世自在王仏が、様々な諸仏の国土について、その天人の善惡、国土の粗妙を説き、法蔵の願に応じてそれらを示現させたことに依るのである。これによって、被救済者となるべき衆生の問題性、さらにはこれから莊嚴しようとしている自国(無量寿仏の国土)の課題が明らかとなり、そこに「無上殊勝の願」が超發されたのである。

願を超發した法蔵は、五劫の思惟を要して仏国土莊嚴のための「清浄行」を撰取し、その願と行を「四十八の誓願」に表し